

くまもとアートポリス公営住宅団地の設計コンセプトと居住実態：5つの公営住宅団地におけるアンケート調査とヒアリング調査をもとに

内田，貴久

<https://hdl.handle.net/2324/7329402>

出版情報：Kyushu University, 2024, 博士（工学），課程博士
バージョン：
権利関係：



熊本アートポリス公営住宅団地の設計コンセプトと住戸近傍の利用実態

The actual states of use around a dwelling unit in the public housing complex of Kumamoto Artpolis.

内田貴久*, 末廣香織**

Takahisa UCHIDA, Kaoru SUEHIRO

The purpose of this study is to examine the relationship between the design concept and actual states of use around a dwelling unit in the public housing complex of Kumamoto Artpolis. This analysis is based on quantitative evaluations of self-expressing elements and spilling-out elements around a terrace in Shinchi-C housing complex and Ryujyabira housing complex. In these housing complexes, we could find a blind screen and a cleared up terrace as an outcome of the inhabitants awareness. The finding is a connection between the use around a terrace and the building composition such as a staircase and the terrace that designed by architect.

Keywords : Kumamoto Artpolis, Public housing complex, Terrace, Staircase, Self-expressing elements

熊本アートポリス, 公営住宅団地, テラス, 階段室, 表出

1. はじめに

1.1 研究の背景と目的

熊本県内には、1988年から始まった「熊本アートポリス事業（以下 KAP）^{注1)}」によって建設された公営住宅団地が 10 団地存在する^{注2)}。これらの団地は、設計者の選考過程が特殊^{注3)}だったこともあり、全国的に有名な建築家が集住空間に対する様々なアイデアを盛り込んで設計されている。さらにそのデザイン性と話題性の高さから多くの建築雑誌等に掲載されたため、今でも設計コンセプトを知ることが容易である。

KAP 公営住宅団地も他の公営住宅団地と同じく低所得者層の居住安定を図る目的で建設された集合住宅であり、現在では高齢者や障害者を抱える世帯など様々な入居形態への対応も求められている。またどの KAP 公営住宅団地も竣工から 30 年近く経過^{注4)}しており、建物施設の老朽化や入居希望者の減少による空き室の増加など、様々な問題を抱えている。

KAP 公営住宅団地に関する既往研究^{注5)}は多数あるが、本稿は築後 30 年近く経った公営住宅団地の現状を対象にしたものである。さらに住居近傍の使われ方を調査した研究^{注6)}を参考とし、現在の KAP 公営住宅団地における住居近傍の使われ方を調査し考察を行った。

KAP 公営住宅団地の住民が、設計者が意図した空間を

どのように使用しているのかを具体的に調査することにより、その設計コンセプトと生活実態との関係について考察するだけでなく、老朽化した KAP 公営団地の今後の活用方法に対する示唆を得たいと考えている。

1.2 調査対象と調査方法について

熊本市営新地団地 C と熊本県営竜蛇平団地の 2 つを調査対象としたのは、この 2 団地の各住戸は共用空間からアクセスできるテラス^{注7)}を有しており、住戸近傍の外部空間に特徴が見られるからである。そのテラスだけでなく玄関前の廊下や階段部分も含めた住戸近傍の利用実態について調査を行った（表 1）。

各住戸近傍に置かれた様々なモノを記録し（図 1）、それらを「表出」と「あふれ出し」に分けて物量評価を行った。置かれたモノが無い場合は 0、5 個以下なら 1、5～10 個なら 2、10 個以上は 3 と数値で表した。住民が意識的にモノを置いた行為数を評価したいと考え、モノの質や大きさではなく数を重視して評価^{注8)}を行った。

上記の分類は、住戸のまわりで観察される様々な物品を「住み手の個性を外に伝え住戸に豊かな表情を与えている植木鉢やユニークな表札等」を表出、「収納不足から住戸前にあふれ出たポリバケツや自転車等」をあふれ出しと、2 側面に分けてとらえた鈴木成文と小林秀樹による研究^{注9)}を参考にしている。加えて、「表出はおおむね意識的な自己表現であるのに対して、あふれ出しは、多くは生活の必要に迫られて致し方なく或いは無意識的にでてくるもの」^{注10)}という鈴木成文の考え方を参考に

* 空間システム専攻博士後期課程

** 都市・建築学部

しながら、住民が住戸近傍をどのように認識して利用しているのかを考察した。

表 1 現地調査の概要

	新地団地C	竜蛇平団地
調査日	2020年10月8日（木）	2020年9月29日（火）
調査時間帯	13：00～17：00（晴れ）	10：00～16：00（晴れ）
調査人員	2名×2班で巡回記録	2名×2班で巡回記録

2. 熊本市営新地団地Cの利用実態

2.1 新地団地Cの建物構成

熊本市北東部の丘陵地に位置する熊本市営団地は、全体を5期に分けて計画され、新地団地Cはその第3期として富永議の設計によって建設された。県道沿いの細長い敷地に、東西240m長の6階および7階建ての住棟の中に180戸の住戸が設けられている。建物全体の動線計画は、2住戸間に階段がある階段室型住棟を基本としながら、2階5階7階に通っている展望廊下^{注11)}から2基のエレベーターへのアクセスが可能な構成となっている（図3、図4）。

敷地の東端と西端では10m近い高低差があるため、住棟西端は地面に接地している^{注12)}が、東端の1階部分はピロティとなっていて人々が自由に使える屋根のある共用空間となっている（図4）。

2.2 新地団地Cの住戸平面

新地団地Cの住戸平面には、展望廊下に面して玄関がある「廊下型」と、階段室に面して玄関があるうえ階段室からテラスを通して住戸へもアクセスが可能な「通り庭型」の2種類^{注14)}がある（図2）。いずれも階段室を中心として向かい合う住戸間にテラスが設けられており、展望廊下や階段から各住戸の専用空間であるテラスが見通せるため、そこに住む住人の生活の表情を垣間見ることができる。通り庭型7階住戸だけは展望廊下や階段から見えない住戸南側にテラスが位置している。

その設計コンセプトによると、建て替え以前の市営木

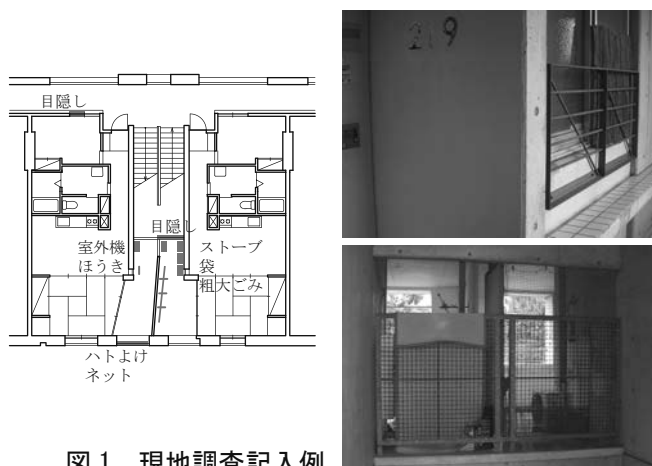


図 1 現地調査記入例

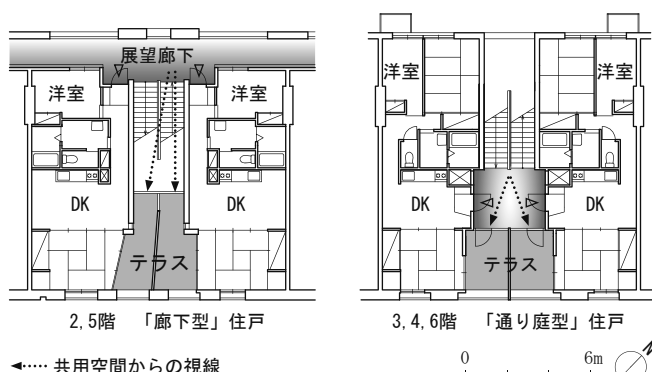


図 2 住戸平面図^{注13)}

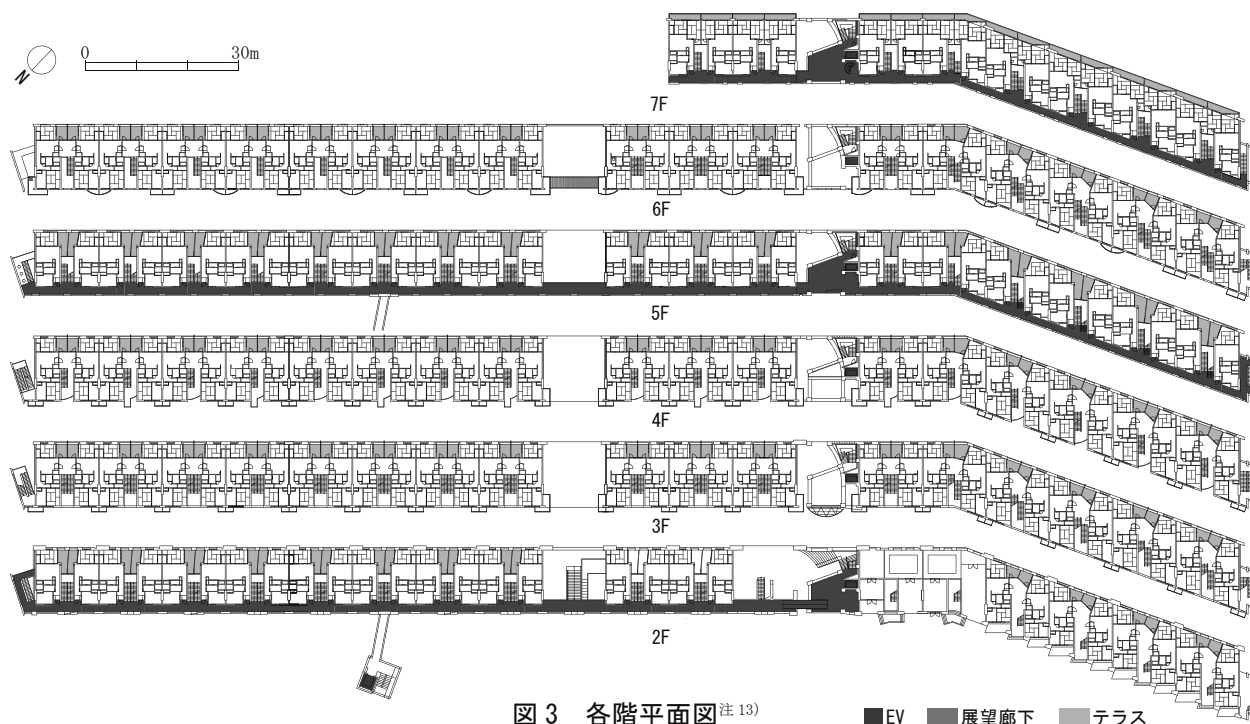


図 3 各階平面図^{注13)}

■EV ■展望廊下 ■テラス

造住宅の住環境が有していた小さな界限性をこの住棟の中にも再現するため、階段室（公共空間）から通り庭的な空間（半公共空間）を抜けて居室まで出入り可能なテラスを多くの住戸に設けており、テラスと居間の一体利用も期待されている^{注15)}。

2.3 空き室の状況^{注16)}

熊本における公営住宅団地の入居募集は団地単位で行われており、新しい入居者は改修工事が終了した住戸から順に入るしかない。入居者は自由に住戸を選べないため、団地における空き室の分布には前居住者の転出だけに関係し、その転出理由には住居の評価も影響していると考えられる。現在多く発生している公営住宅団地における空き室の分布から考察を行った。

新地団地Cの全180戸の住戸のうち44戸が空き室（空室率24%）であり、廊下型で11戸（全70戸）、通り庭型で33戸（全110戸）であった^{注17)}。空き室の分布を見ると全体的に上層階のほうが多く見られるが、展望廊下のある2階と5階には空き室が少ない。（表2、図5）同じ最上階でも、西側の最上階である7階は東側の6階と違って展望廊下があってエレベーターまでの移動が容易なため空き室は少ないと考えられる。

3階住戸と6階住戸はエレベーターが着床する展望廊下から階段で1階上がる必要があるのは同じだが、地上からの移動時間が長いからか6階のほうが空き室が目立つ。さらに、展望廊下から階段で1階下りだけの4階が6階同様に空き室が多い。同様に展望廊下から1階下りる住棟西側の6階住戸に空き室が少ないのに対し、4階は住棟全体に空き室が見られる。4階住戸の空室率が



写真1 表出・あふれ出しの評価例

表2 階別の空き室戸数（単位：戸）

	住戸数	空き室数	空き室率
7階	16	3	19%
6階	34	12	35%
5階	34	5	15%
4階	34	13	38%
3階	34	7	21%
2階	28	4	14%
合計	180	44	24%

表3 表出・あふれ出しの評価分布（単位：戸）

評価	表出				あふれ出し				空き室
	3	2	1	0	3	2	1	0	
7階	0	0	6	7	0	2	8	3	3
6階	0	3	4	15	6	5	3	8	12
5階	0	0	4	25	4	7	5	13	5
4階	0	4	4	13	7	7	0	7	13
3階	0	1	1	25	4	8	2	13	7
2階	0	4	4	16	4	3	4	13	4
合計	0	12	23	101	25	32	22	57	44

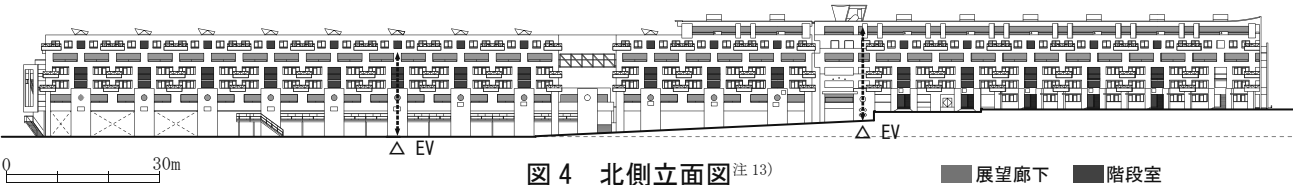


図4 北側立面図^{注13)}

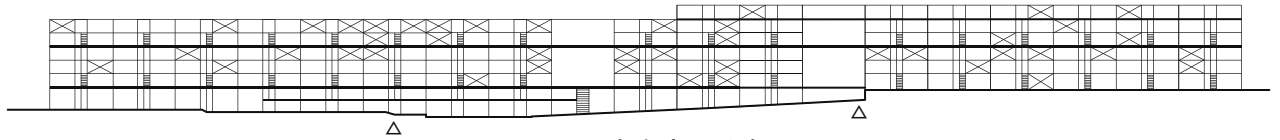


図5 空き室の分布

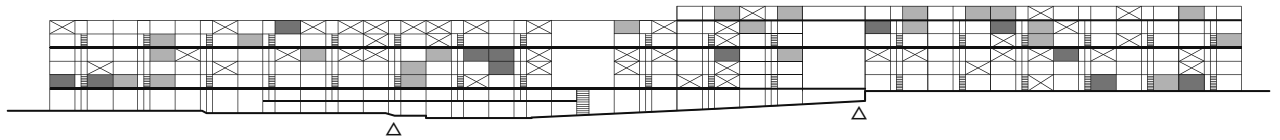


図6 表出の評価分布

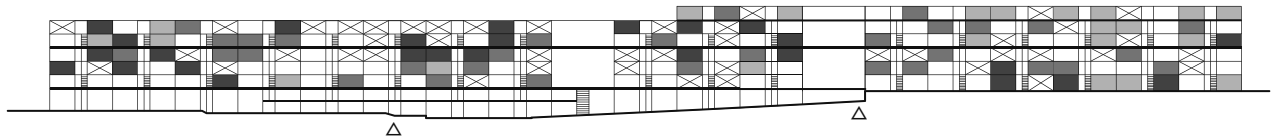


図7 あふれ出しの評価分布



写真2 目隠しの評価例

高い理由は、住戸までの距離や移動経路とは別の要因が関係していると考えられる。

2.4 共用空間の利用実態

廊下型と通り庭型、どちらのテラスも住棟の南北両側に開けていて通風も良いため、植物や洗濯物などが多く見られた。だがそれ以上に、物置としての利用やゴミ等が置かれている住戸のほうが目立っていた。廊下型住戸のテラスと通り庭型住戸のテラスでは利用動線が全く異なるが、両方とも共用空間と専用庭との境目に視線を遮断する目隠しがつけられている住戸が多く、自宅の専用空間であるテラスのプライバシーを守ろうとする意識が強く感じられた。

テラス内部は目隠しで見えない部分も多かったが、階段室側から見える範囲で置かれているモノを確認し、可能な限り記録を行った。テラスだけでなく、玄関扉の近傍、展望廊下に面した壁沿いに置かれたモノも含め、現地調査参加者全員で現地写真と置かれていたモノの記録を見て判断した（写真1）。

それを図化してみると、現地での印象と同様に、全体的に表出が少なく、あふれ出しのほうが多いのがわかる（表3、図6、図7）。展望廊下がある2階5階7階の住戸と、階段室を上下移動する必要がある3階4階6階の住戸とでは、表出・あふれ出し共に大きな違いは感じられない。その代わり階数とは関係なく、あふれ出しが多い住戸には部分的なまとまりが見られた。住棟西端は接地階の近くに、住棟東端では階段室単位でのあふれ出しが多い住戸のまとまりが見られた。



写真3 よしずの使用状況（図8、C部）

2.5 目隠しの評価から見た利用実態

新地団地Cのテラスは共用空間（展望廊下や階段室）を通る人から見通せてしまうため、多くの住戸が階段室とテラスの間の柵部分に、ビニルシートやベニヤ板、よしずといった目隠しを取り付けていた。空き室を除く全135戸中80戸の住戸が目隠しを設置しており、目隠しも新地団地Cにおける重要なあふれ出し要素と考え、その遮る程度に応じて評価、数値化を行った（写真2）。

その評価を図化してみると、あふれ出しの評価分布と同様に、住棟中央部分に比べて住棟東端（図8、A部）と西端下部（図8、B部）のほうが目隠しの程度が高い（表4、図8）。空き室の分布からそう見えるだけかもしれないが、少なくともあふれ出しの量と目隠しの設置程度には関係性があると思われる。表出とあふれ出しの評価分布と同じく、階数や展望廊下との関係性は低いと言える。

現地で立ち話した団地住人からの指摘で気付いたことだが、図8のC部の階段室に面する住戸の多くが「よしず」で目隠ししていた（写真3）。この様にある階段室に同素材の目隠しがまとまって見られるのは、階段を利用する住人がよく目にする他家の目隠しを真似して自

表4 階別の目隠し評価分布

評価	目隠し				空き室
	3	2	1	0	
7階	0	0	2	11	3
6階	4	7	1	10	12
5階	6	5	3	15	5
4階	5	7	1	8	13
3階	10	10	2	5	7
2階	11	5	1	7	4
合計	36	34	10	56	44

（単位：戸）

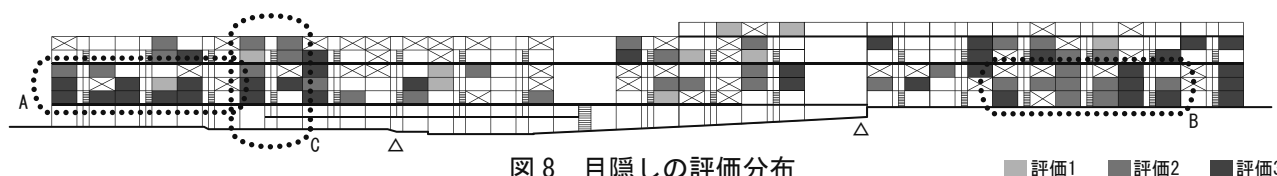


図8 目隠しの評価分布

宅も同じ素材で目隠しした結果と考えられ、階段室利用の際の視線によるコミュニケーションの結果と言える。

2.6 新地団地C 共用空間利用についての考察

空き室の分布には階数や展望廊下との関係性が見られたが、表出とあふれ出しから分析したテラスと住戸近傍の利用実態にはその関係性が見られなかった。だがこの団地の特徴的あふれ出し要素である目隠しの分布には、図8、C部のように階段室の上下移動の影響が見られる。

地上から住戸に上がることを考えると新地団地Cの特徴であるエレベーター^{注18)}と展望廊下に意識がいくが、住戸から地上に降りる際には階段室を下に降りていく方が距離が短い住戸が多い。展望廊下を通るよりも階段室を利用するほうがテラス前を通りながら表出やあふれ出しといったモノをより近くで目にすることもあり、階段室のほうがこの団地内での視線によるコミュニケーションと関係が深いと考えられる。

3. 熊本県営竜蛇平団地の利用実態

3.1 竜蛇平団地の建物構成

竜蛇平団地は1990年から1994年にかけて元倉眞琴の設計によって建設された。大小の三角形を並べたやや変則的な敷地に、RC造の地上5階建て、全88戸の住戸が設けられている。その建物形状や立地場所から「段状Aタイプ」「段状Bタイプ」「街区タイプ」と名称がつけられた^{注19)}3つの住棟が建っており(図10、図11、図12)、

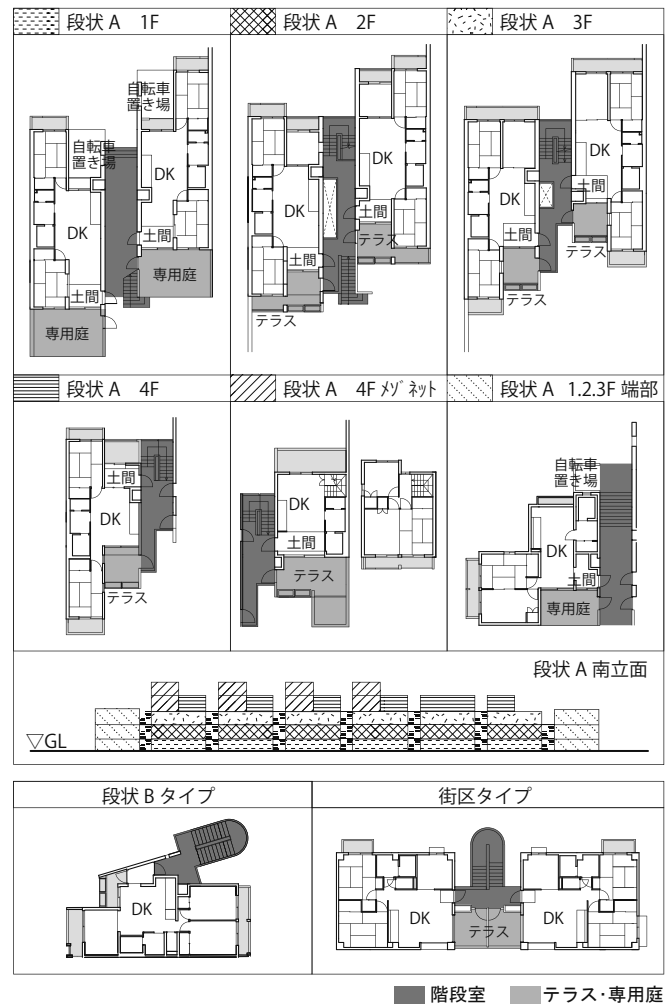


図9 様々なタイプの住戸平面図^{注13)}

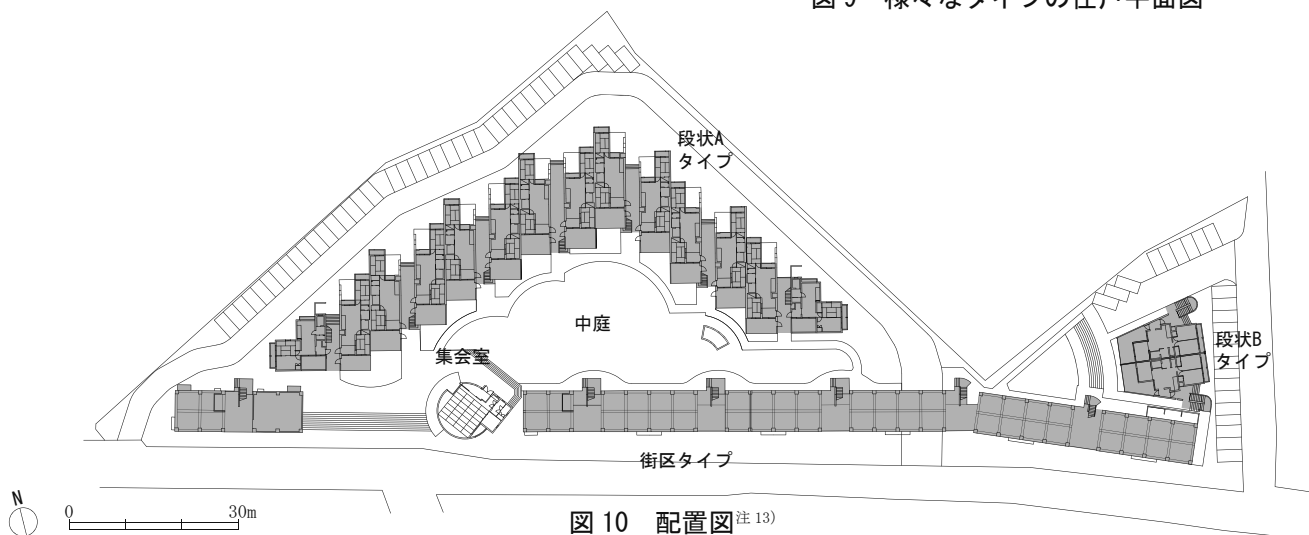


図10 配置図^{注13)}



図11 段状Aタイプ 南側立面図^{注13)}



図12 街区タイプ 南側立面図^{注13)}

中でも1階から上階に向かってセットバックした形状を持つ段状Aタイプは、階段室とテラスと住戸が複雑な構成をしている（図13）。

団地全体の共用空間としては、前面道路に沿って建つ街路タイプ1階のピロティ空間と、街区タイプと段状Aタイプの間に中庭が設けられている。敷地の中央にある中庭は、建物上階がセットバックしている上に階段室が南北に抜けている段状Aタイプと1階がピロティの街区タイプで囲われているため、囲まれているながらも息苦しさを感ぜさせない開かれた空間となっている。

3.2 竜蛇平団地の住戸平面

竜蛇平団地の住戸平面には8つの型があるが、そのうち6つの型が段状Aタイプの住戸である（図9）。段状Aタイプでは各住戸の南側にテラスが設けられており、新地団地Cの通り庭型と同様に、住戸間にある階段室からテラスを通過して住戸にアクセス可能である。さらにそのテラスは、段状構成のため上階の階段室からも見下ろすことが可能である。街区タイプにも2住戸間に階段室とそこから出入り可能なテラスがあるが、段状Bタイプにはそのようなテラスは設けられていない。

この団地の中に「道を歩くと他人の庭が見え、敷地がそう広くなければ庭越しにその家の様子が少しわかる」ような関係を持ち込みたいという元倉真琴の考えから、平面計画に図14のような構成が持ち込まれており、パブリックは各住戸間の廊下と階段、セミパブリックはテラス、セミプライベートは玄関土間、プライベートは各住戸と定義されている^{注20}。段状Aタイプの住戸に見られる、テラスと玄関部分に広い土間は上記のコンセプトによるものである。

3.3 空き室の状況^{注16}

竜蛇平団地の全88戸の住戸のうち10戸が空き室（空室率11%）であり、段状Aタイプでは8戸（全53戸）、段状Bタイプで1戸（全9戸）、街区タイプで1戸（全26戸）であった^{注21}。エレベーターは無く住戸へは階段を登るしかないので、やはり上階のほうに空き室が多く見られた（表5、図15）。利便性が高い1階住戸にも空き室が見られるが、それらは専用庭^{注22}とリビングが中庭と階段室の通行者から見えやすいことが影響していると考えられる。

3.4 共用空間の利用実態

新地団地Cと同様に、各住戸の「表出」と「あふれ出し」の量を調査し、0～3までの4段階で評価、数値化した（写真4）。やはり全体的に表出が少なく、あふれ出しのほうが多く見られたが、新地団地Cに比べるとあふれ出しの量はそれほど多くなかった（表6、図16、図17）。そもそも表出もあふれ出しも量が少なく、比較片的付いたテラスが多かった。

竜蛇平団地では階段室から各住戸のテラスが見通せる

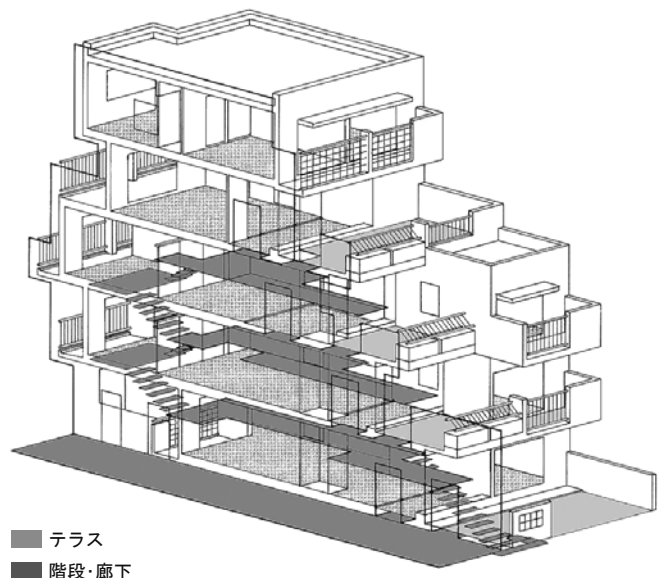


図13 階段室、テラスと住戸の関係^{注20}

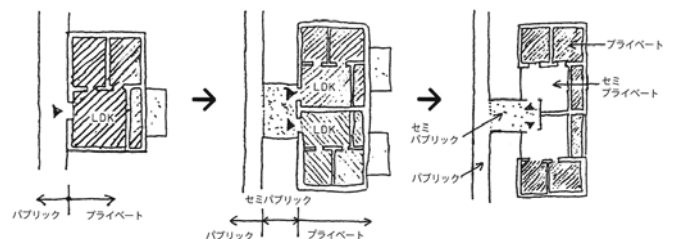


図14 階段室、テラスと住戸の関係^{注20}



（表出:0、あふれ出し:0）



（表出:0、あふれ出し:1）



（表出:3、あふれ出し:0）



（表出:0、あふれ出し:3）



（表出:3、あふれ出し:2）



（表出:2、あふれ出し:1）

写真4 表出・あふれ出しの評価例

うえに段状 A タイプのテラスは上層階の階段室から見下ろすことも出来るため、新地団地 C のテラスのように目隠しを設置しても隠しきれないテラスが多い。その結果、多くの住人にテラスを片付ける意識が生まれていると考えられる。また、段状 A タイプの中央(図 16 と図 17、D 部)に、表出がほとんど無くあふれ出しも少ない住戸がまとまってみられた(写真 5)。このように表出とあふれ出しの評価が同程度の住戸がある階段室にまとまって見られるのは、ある住戸のテラス利用風景が別のテラス利用に影響を与えたと考えられ、新地団地 C の目隠しの分布と同様に、階段室を上下移動する際の視線によるコミュニケーションの結果と考えられる。

元倉真琴はその設計コンセプト^{注20)}の中で、中庭を共有することによって団地に住む人々が隣人として意識しあうことも期待していたが、調査時に見た中庭は、そこに設置されたベンチが隠れるほどに雑草が生い茂っていて、有効活用しているとは全く思えない状況であった。

3.5 竜蛇平団地共用空間利用についての考察

新地団地 C に比べて全体的にテラスや共用空間に置かれたモノが少ないせいもあるが、表出とあふれ出しの評価分布と建物構成の間に目立った関係性は見られなかった。ただ同程度の表出とあふれ出しの評価がまとまって見られる図 16、D 部の住戸群に限っては、その共用空間の利用状況は、階段室とそこから見えるテラスという空間構成が大きく関係している。

竜蛇平団地は、表出もあふれ出しも少ない住戸が多いため、その住戸近傍空間を積極的に利用しているとは感じられなかったが、部分的ではあるが段状 A タイプ 1 階に、表出が多い上に専用庭を有効活用していた住戸が見られた(写真 6 左)。専用庭まで自宅のリビングと意識しているようで、植木が並べられた専用庭の真中で、住人が屋外テーブルに座ってノート PC 作業をしていた。

同じ段状 A タイプの 1 階に、雑草も生えていない手入れの行き届いた専用庭も見られた。住人がその住戸近傍を綺麗に手入れしている結果としてモノが少ないのだと考え、表出が全くない庭なのだが感じの良い印象を受けた(写真 6)^{注23)}。モノの量では前述の専用庭利用の状況と正反対なのだが、住戸近傍の空間を自宅の領域と認識し、他人から見られてもいいように美化しておくという意識を持っている点では同じと考えられる。

4. 設計コンセプトと住戸近傍の利用実態

富永譲は「展望廊下を歩くと各住戸にあるテラスを通してはみ出した生活の表情が上下に隙間から感じられる」^{注24)}ように通り庭のようなテラスを提案し、元倉真琴は団地の階段や廊下に「居ながらにして周囲の生活の気配が感じ取れる」^{注25)}ように道に面した庭のようなテラスを提案している。どちらの団地も共用空間から良く見える位置にテラスがあるのだが、現在見られるその利用実態は、設計者が期待した風景ではないだろう。

どちらの団地も、住民が意識的に表出させたモノは少なかったが、新地団地 C の目隠しはあふれ出たモノを少

表 5 階別の空き室戸数 (単位：戸)

	住戸数	空き室数	空き室率
5階	1	0	0%
4階	13	3	23%
3階	29	5	17%
2階	29	0	0%
1階	16	2	13%
合計	88	10	11%

表 6 表出・あふれ出しの評価分布 (単位：戸)

評価	表出				あふれ出し				空き室
	3	2	1	0	3	2	1	0	
5階	0	0	1	0	0	0	1	0	0
4階	0	0	6	4	0	0	7	3	3
3階	2	5	9	8	0	2	16	6	5
2階	0	3	12	14	1	9	13	6	0
1階	1	0	7	6	1	1	7	5	2
合計	3	8	35	32	2	12	44	20	10

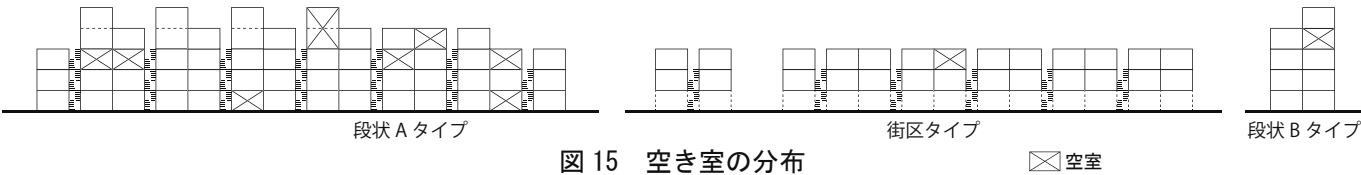


図 15 空き室の分布

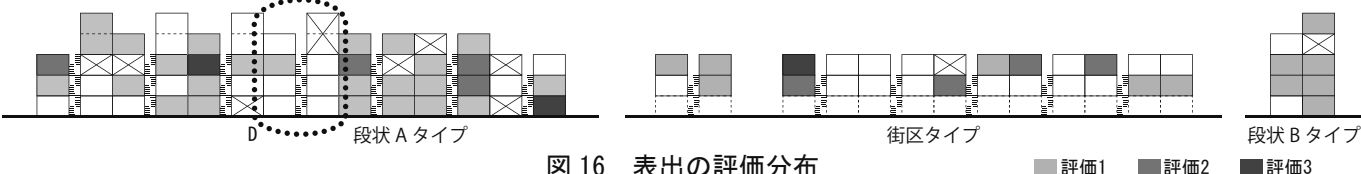


図 16 表出の評価分布

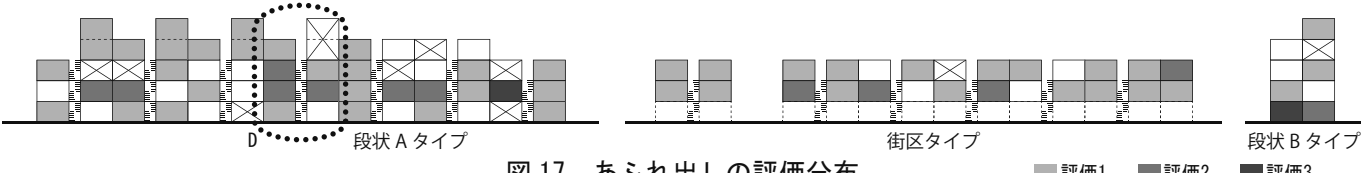


図 17 あふれ出しの評価分布



(表出:0、あふれ出し:1)



(表出:0、あふれ出し:0)



(表出:0、あふれ出し:2)



(表出:0、あふれ出し:2)



(表出:1、あふれ出し:2)



(表出:0、あふれ出し:1)

写真5 図中D部の評価例



専用庭に置かれた椅子テーブルで旦那さんがノートPCで作業していた。周囲の花は奥さんの手によるもの。



洗濯物を干しているだけで、他には全くモノが置かれていない。庭の手入れも行き届いている。

写真6 専用庭の特徴的使用例

しでも隠そうとする意識の表れであり、竜蛇平団地の全くモノが無いテラスは自宅の近傍空間を美しく維持しようとする意識の表れだと言える。植栽や凝ったサインのような「表出」こそ少なかったが、上記のように住戸近傍に「住人が意識的に行動した結果」が見られるのは、他の団地居住者からよく見える位置に各住戸のテラスを設けた設計コンセプトと無関係ではないと思われる。

5. おわりに

日々通る階段や廊下からよく見える位置にテラスが設けられたことで、階段室利用を通じてある住居近傍の利用風景が他住人の生活に影響を与えていた。だとすれば、竜蛇平団地の段状Aタイプ1階に見られたテラスを自宅のリビングのように有効活用している風景が他住人に影響を与え、同じようにテラスや住居近傍を積極的に利用する人が増えることで、設計者が期待したであろう豊かな

な団地風景が見られるようになることを期待したい。逆にモノが全く置かれないテラスの風景が団地全体に広がったとしても、それも団地に持ち込まれた設計コンセプトによって住人の美化意識が団地全体に広がった結果だと言えるだろう。

本稿では住宅近傍に置かれたモノを調査し考察を行ったが、今回の現地調査だけではその配置が一時的なものか常設的なものかも明らかではない。団地住民に対するアンケート調査とヒアリング調査を継続して行っているため、より詳細な団地住民の生活実態の把握と公営住宅団地の活用に対する考察は、今後の研究の課題としたい。

注釈

注1) KAPは、当時の熊本県知事細川護熙が建築家磯崎新に協力を要請する形で始められ、建築や都市計画を通して都市全体の文化向上を図った全国初の試みだった。国内外の建築家が設計した多様なデザインの建築物が街中に多数点在することで、面として全く新しい街づくりにつながっていくと考えられていた。参考文献1) 2)

注2) 竣工年順に、県営保田窪団地(1991年)、市営新地団地A(1991年)、市営新地団地B(1992年)、県営帯山A団地(1992年)、市営新地団地C(1993年)、県営新渡鹿団地(1993年)市営詫麻団地(1994年)、県営竜蛇平団地(1994年)、市営新地団地D(1995年)、市営新地団地E(1995年)が建設されている。

注3) KAP開始当初は、一般的な公共事業とは違い、磯崎コミッショナーが推薦した建築家に直接設計委託する特命発注形式をとっていた。参考文献1)2)

注4) そのほとんどがKAP開始当初に建設されており、市営新地団地E(竣工1995年)以降、KAPでは規模の大きな公営団地は建てられていない。

注5) 参考文献3)や参考文献4)等

注6) 参考文献5)6)を筆頭に、参考文献7)8)等

注7) 一般的にバルコニーと呼ばれる専用屋外部分だが、富永譲と元倉真琴の両方の設計コンセプトにおいてテラスと表現されていたため、本稿でも同じ表現を使用した。参考文献9)10)

注8) 多様なモノが置かれていたため、恣意的に数量評価せざるを得なかった。具体的には、まとまって置かれた同種の粗大ごみは一つに数え、大きな粗大ゴミでも一つ、置物や自作の表札のような表出はほんの小さなモノでも一つと数えた。

注9) 参考文献5)

注10) 参考文献11) P43

注11) 展望廊下という名称は、富永譲の設計コンセプトにある名称を使用した。参考文献9)

- 注 12) 住棟西端では2階が接地階であり、住戸番号も201等となっている。
- 注 13) 本稿に使用した団地の平面図および立面図等は、熊本県と熊本市に保存されている建設時の実施設計図書を元にしてCAD化した。
- 注 14) 通り庭型、廊下型という名称は、富永譲の設計コンセプトにある名称を使用した。参考文献 9)
- 注 15) 参考文献 1) P62、参考文献 2) P118
- 注 16) 熊本の公営住宅団地においては、入居者がいない住戸の郵便受けには投函防止の封をしており、その有無から、住戸が空き室かどうかを判断した。
- 注 17) 2020年10月調査時点。
- 注 18) 新地団地A～Eの中でエレベーターが設置されているのは新地団地Cだけである。
- 注 19) 段状A、段状B、街区タイプという名称は、元倉真琴の設計コンセプトにある名称を使用した。参考文献 10)
- 注 20) 参考文献 10) P158
- 注 21) 2020年9月調査時点。
- 注 22) 段状Aタイプ1階住戸は住戸南側が地面であり、団地中庭との境目も樹木で仕切られている。
- 注 23) 写真右側の生垣は、中庭からの視線を遮る目的で団地建設と同時に植えられた樹木だが、手入れは専用庭のある1階住人によって行われている。
- 注 24) 参考文献 9) P176
- 注 25) 参考文献 10) P158

参考文献

- 1) SD 第316号, 鹿島出版会, 1991年1月
- 2) TheJapanArchitect-10, 1993年2月, 新建築社
- 3) 延藤安弘 他4名: 公私室分離型住戸プランの評価 - 保田窪第一団地に関する研究 -, 日本建築学会大会学術講演梗概集 (北陸), 1992年8月
- 4) 實松宏一、田中智之: 集住体と界索性, 日本建築学会学術講演梗概集 (中国), 2008年9月
- 5) 小林秀樹、鈴木成文: 集合住宅における共有領域の形成に関する研究 - その1 共有領域の構造 -, 日本建築学会論文報告集 第307号 pp. 102-111, 1981年9月
- 6) 小林秀樹、鈴木成文: 集合住宅における共有領域の形成に関する研究 - その2 建築形態の影響 -, 日本建築学会論文報告集 第319号 pp. 121-131, 1982年9月
- 7) 小林秀樹: 高層集合住宅における共有領域の経年変化経年変化にともなう生活領域の変化に関する研究 その2, 日本建築学科計画系論文集 第77巻 第680号, 2012年10月
- 8) 宗本順三 他4名: あふれ出し・表出の概念整理と窓に置かれた物への適用の妥当性, 日本建築学会大会学術講演梗概集 (関東), 1997年9月
- 9) 新建築 第69巻3号, 1994年3月, 新建築社
- 10) 新建築住宅特集 9412 第104号, 1994年12月, 新建築社
- 11) 鈴木成文: 「いえ」と「まち」, SD選書 190, 1984年
- 12) 鈴木成文: 住まいを読む - 現代日本住居論 -, 建築資料研究社, 1999年
- 13) 清水肇, 集合住宅における公私の中間領域の形成段階的領域形成を意図して計画された平良市馬場団地の実態調査, 日本建築学会大会学術講演梗概集 (東海), 2003年9月
- 14) 初見学 他4名: ハイタウン北方・高橋棟 (非分節型住居) の住まれ方, 日本建築学会大会学術講演梗概集 (東北), 2000年9月
- 15) 初見学 他4名: ハイタウン北方・妹島棟 (等価分節型住居) の住まれ方, 日本建築学会大会学術講演梗概集 (東北), 2000年9月

(受理: 令和3年10月25日)